

機関番号：15401

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19720117

研究課題名 (和文)

日英語の多次元事態認知に関する研究

研究課題名 (英文)

A Study on Multidimensional Event Construals in Japanese and English

研究代表者

町田 章 (MACHIDA AKIRA)

広島大学・大学院総合科学研究科・准教授

研究者番号：40435285

研究成果の概要 (和文)：

言語を行為連鎖の観点だけから分析するモデルを単次元事態認知モデルとすると、異なるプレーンが多層的に関係している事態把握のあり方や行為連鎖の中に参照点構造が共存する事態把握のあり方、そして、単一の事態を事態内視点と事態外視点という異なる二つの視点から把握する事態把握のあり方は多次元事態認知モデルと呼ぶべきものである。本研究では、これらの多次元事態認知モデルに基づき、日英語の受身文とその周辺構文に関する研究を行った。

研究成果の概要 (英文)：

When an event construal is analyzed only with respect to the action chain model, it may be referred to as unidimensional cognitive model. In contrast, we assume multidimensional cognitive models, which regard an event construal as a multi stratal complex of cognitive planes, as a conceptualization based on a reference point construction intrinsic to an action chain, or as a conceptual matrix with both event-internal and event-external perspectives. In this research, some aspects of multidimensional event construals are investigated with special reference to passive constructions in Japanese and English.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,600,000	480,000	3,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：①認知文法 ②英語 ③日本語 ④受身文 ⑤視点 ⑥プレーン ⑦参照点構造  
⑧主観性

## 1. 研究開始当初の背景

これまで、言語研究の分野では言語を自律的な体系としてみる捉え方が主流を占めてきた。そのため、人間の一般的認知能力や文化慣習に根ざした意味論の分野にはあまり焦点が当てられてこなかつ

た。しかしながら、ことばの意味、特に、意味が表す概念や概念化の研究が進むにつれて、言語の自律性について疑問が向けられるようになった。

このような流れの中から、言語能力と他の認知能力は不可分であるとの立場を

取る認知言語学派が出現してきた。その中でも特にラネカーの認知文法は、純粋な文法現象でさえも自律的な統語操作の産物として見るのではなく、人間の認知の反映として捉えることを提唱し、文の容認性を決定する要因は自律的な統語規則ではなく、構文の意味と事態把握のメカニズムの関係に帰せられると主張するようになった。

認知文法が認知言語学派に与えているインパクトは非常に大きい。その理論構成物（行為連鎖、参照点構造、プレーンなど）をどのように言語現象に適用するかという点に関しては、研究者間でかなりのスタンスの違いがある。特に、問題なのは、行為連鎖や参照点構造という比較的分かりやすい理論構成物だけを用いた言語分析だけに注目が集まる傾向があることである。これでは、認知文法の利点が十分に発揮できないだけでなく、言語の深層の部分に対する深い分析がなされなくなってしまう。

言語が人間の認知能力と不可分であるならば、当然、人間の認知の営みと同じように多面的で複雑な形相をしているはずである。言語現象を分析するためには、このような複雑な認知メカニズムを反映させるモデルの開発が必要とされるのである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、Langacker(1999)において提案されているプレーンモデルやLangacker(1993)において提案されている参照点構造モデルを発展させた多次元事態認知モデルを提案し、これを用いて日英語の文法現象を解明することにある。本研究で多次元事態認知モデルの必要性を主張するのは、行為連鎖だけに着目した従来の研究スタンスでは様々な認知的要素を簡略化しすぎてしまい人間に本質的な複合的な認知作用を正しく捉えることができないと考えるからである。

そして、この多次元事態認知モデルを用いることにより、日英語の文法構文、特に受身文とその周辺構文に関して新たな分析の可能性を提示することである。

## 3. 研究の方法

研究方法としては、理論言語学の主流となっている内省法を用いた。当初、コーパスによるデータ収集も計画されていたが、日本語においてはまだコーパスが十分に整備されているとはいえない上に、コーパスの整備が進んでいる英語においてでさえそれほど興味深いデータが発掘できなかった。例えば、前置詞受身文（擬

似受身文）はイディオムの表現こそ多くのデータが集められるものの、一般に言語学の文献で議論されるような内省に基づく用例はほとんどヒットしなかった。しかしながら、このような事実から内省に基づく用例をデータとして信頼できないと結論付けることはできない。実際、多くの母語話者に問い合わせてもほとんどの内省に基づく用例は信頼に値するものであることがわかる。当然のことだが、コーパスの整備が進んでいる英語でさえ、コーパスがこの言語の現状を全くそのままに反映しているわけではないのである。

研究スケジュールとしては、国内学会と国際学会における研究発表を柱に研究を組み立てた。国内では、日本認知言語学会、日本言語学会等において研究発表を行うことができた。国際学会では、International Cognitive Linguistics Conference 10において研究発表を行った。また2011年7月にInternational Cognitive Linguistics Conference 11（西安市、中国）においても研究発表することが決まっている。

## 4. 研究成果

研究成果は、学会での口頭発表や論文として公表されている。以下に、その概要を整理する。

- (1) 日本語受動文に働く視点制約に関する研究。日本語の受動文がどのような認知メカニズムに動機付けられているのかを明らかにした。通常、受動文は他動性、つまり行為連鎖の観点から分析されることが多いが、本研究では、参照点構造モデルとプレーンモデルを援用し、受動文に反映されている多次元的な事態認知のメカニズムを提案した。その結果、有生物を差し置いて無生物を主語にできないという視点制約に一見違反するように見える事例の背後にある事態把握のあり方が明らかとなった。これは、受動文を研究する際に、他動性（行為連鎖）という一つの尺度だけでなく、多次元的な認知過程の存在を仮定する必要があることを示すものである。（「視点制約と日本語受動文の事態把握」）
- (2) 多次元プレーンモデルによる構文の拡張に関する研究。特に、日英語の受動文を取り上げ、従来型の事象叙述と属性叙述という分類では記述的にも妥当性を欠くことを指摘した。その上で、多次元プレーンモデルを採用することにより、記述的な妥当性だけでなく、より深い認知メカニズムまでも明らかにされることを主

張した。これにより、他動性（受影性）との関わりが必ずしも自明的ではない特徴づけ制約(Takami 1995)がなぜ受身文に存在するのかという問題に対する認知文法からの説明が提案された。（「多次元プレーンモデルによる構文の拡張－日英語の属性叙述受動文－」）

- (3) 日英語の他動性の低い受身文に出現する被害性に関する研究。被害性は、単なる他動性の延長ではなく、語用論的強化によって構文に付与された意味であることを論証した。そして、他動性が低い場合に被害性が顕著になる理由を、その背後にある推論における参照点構造においてプロファイルシフトという認知現象が生じているためであると結論付けた。この研究においても、行為連鎖だけを用いた単次元モデルでは限界があることを指摘した。（「被害性と語用論的強化－日英語の受身文を例に－」）
- (4) 日本語被害受身文において参与者項が増加する現象に関する研究。日本語被害受身文では、対応する能動文よりも項の数が増加するという特徴が見られる。（そのため、日本語の被害受身文は対応する能動文を持たないともいわれる。）この問題は、一般に行為連鎖の観点から研究されてきた。他動性が高くなるとエネルギー伝達の連鎖が他の参与者にも及ぶようになるという見方である。この観察は一見妥当性を持っているように見えるが、被害受身文と中立受身文の中間に当たる持ち主の受身文の説明ができないという問題が残る。持ち主の受身文は意味的には被害性を持たないが、項の数が増加するという点においては被害受身文と共通する。このような問題を解決するため、行為連鎖に内在する参照点構造を拡張の動機付けとして参与者項が増加する現象を説明した。これにより、事態に内在的な参照点構造から外在的な参照点構造までの構文の拡張のメカニズムが明らかとなり、持ち主の受身から被害受身までの拡張の経路が明らかとなった。（‘Reference Point Structure in Japanese Adversative Passives’）
- (5) ラネカーの主体性の問題点に関する研究。本研究では日英語を特徴付ける際に観察される事態内視点・事態外視点という概念とラネカーの主体性の概念の違いを明らかにし、上記の事態内視点をステージモデルに取り込むための修正案を提案した。この修正案を用いると、日英語の類型論的特徴だけでなく、従来のモデルで

見過ごされていた僅かな意味の差異も明示的に記述できることが示された。そして、この図式を日本語のラレル構文に適用することによって、自発から可能を経て受身へとラレル構文が拡張する認知メカニズムが明らかにされた。（「言語表現に見られる主体性－ラレル構文を例に－」）

- (6) 多次元事態認知モデルを用いた行為連鎖の研究。通常主語以外の位置に生ずる要素が、主語として表現される構文がある。例えば、中間構文、受身文などである。移動という統語操作を仮定しない認知文法では、このような構文の差異をどのように図式化するのかということが問題となる。通常、行為連鎖だけを用いた単次元認知モデルでは、スコープの違い、プロファイルの違いとして図式化される。しかしながら、このような単次元モデルでは、これらの構文の差異が明示できないだけでなく、これらの構文の共通点も記述できない。さらに、これらの構文と他の構文に見られる共通点も記述できない。このような問題意識を基に、行為連鎖として把握される事態にも、異なる二つのモードがあると提案した。人間の事態把握のモードには、事態単位で事態を把握するモードと参与者単位で事態を把握するモードが共存していると考えるのである。これにより、いくつかの構文に見られる共通性と差異を認知文法の図式で正しくとらえることを示した。（「事態把握の類型－属性叙述文の認知図式化に関する提案－」）
- (7) ラレル構文の意味拡張に関する研究。ラレルという形式は自発、可能、受身、尊敬という四つの意味を表すと言われている。通常は、個別の用法についてそれぞれ別の角度から研究されることが多いが、形式と意味の対応という観点から考えた場合、なぜこの構文はこのような多義の構造を示しているのか、そして、その認知的動機付けは何なのかを明らかにすることが必要となる。本研究では、事態内視点と事態外視点という二つの事態把握のモードを仮定することにより、ラレル構文の拡張のメカニズムを探った。結果として、直接受身から間接受身という拡張の方向性に関する通説に対し、直接間接未分化の受身から両者に分離したという結論に至った。（「日本語ラレル構文の形式と意味－認知文法からのアプローチ－」）

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

1. 町田 章「言語表現に見られる主体性ーラレル構文を例にー」『長野県短期大学紀要』64号, 2009年, pp.103-114. (査読無)
2. Machida, Akira 'Reference Point Structure in Japanese Adversative Passives,' *Osaka University Papers in English Linguistics 12 (OUPEL 12)*, 2008年, pp.79-98. (査読無)
3. 町田 章「被害性と語用論的強化ー日英語の受動文を例にー」『長野県短期大学紀要』62号, 2007年, pp.115-121. (査読無)
4. 町田 章「多次元プレーンモデルによる構文の拡張ー日英語の属性叙述受動文ー」『日本認知言語学会論文集 第7巻』(JCLA 7 日本認知言語学会誌), 2007年, pp.416-426. (査読有)

[学会発表] (計5件)

1. 町田 章「ステージモデル再考ー主体的把握と事態内視点ー」日本英文学会第62回中部支部大会終了後ワークショップ『主観性から見る言語分析の展望』, 2010年10月17日, 金沢大学.
2. 町田 章「主観的状况と日本語受身文」日本言語学会第140回大会, 2010年6月19日, 筑波大学.
3. 町田 章「主体性とラレル構文」日本言語学会第139回大会, 2009年11月28日, 神戸大学.
4. 町田 章「事態把握モードと参照点構造ー日本語「ハ」の認知構造ー」日本言語学会夏期講座 2008 ナイトセッション, 2008年8月22日, 京都大学.
5. Machida, Akira 'Reference Point Structures in Japanese Adversative Passive,' 10th International Cognitive Linguistics Conference, 2007年7月18日, Krakow, Poland.

[図書] (計3件)

1. 町田 章「日本語ラレル構文の形式と意味ー認知文法からのアプローチー」大庭幸男・岡田禎之(編著)『意味と形式のはざま』英宝社, 2011年, pp.163-177.
2. 町田 章「事態把握の類型ー属性叙述文の認知図式化に関する提案ー」吉波弘, 中澤和夫, 武内信一, 外池滋生, 川端朋広, 野村忠央, 山本史歩子(共編), 『英語研究の次世代に向けて 秋元実治教授定年退職記念論文集』ひつじ書房, 2010年, pp.213-225.
3. 町田 章「視点制約と日本語受動文の事態把握」河上誓作, 谷口一美(共編), 『こと

ばと視点』英宝社, 2007年, pp.104-118.

[その他]

ホームページ等

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/akimachida/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

町田 章 (MACHIDA AKIRA)

広島大学・大学院総合科学研究科・准教授  
研究者番号: 40435285

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし